平和への一歩

二見中学校二年　馬越結也

「もっとくわしく話を聞いておくんだった。」

僕には、もう一度、ゆっくりと話を聞きたいと後悔していることがあります。それは、おととし亡くなったひいおばあちゃんの戦争体験です。ひいおばあちゃんは、広島の島にすんでいて、当時、女学生でした。爆心地から遠かったものの、原子爆弾が投下された後の、空に大きく広がるきのこ雲を見たそうです。

僕は昔、夏休みに帰省した時、その話を聞いたことがありました。しかし、小さかった僕にとって、それは昔のことで、どれほど恐ろしいものなのか、その時、その後何を見て、何を感じたのか深く考えることをしませんでした。中学生になった今なら、

「きのこ雲って、どんな感じだった？」

「その後、逃げてきた人ってどうだったの？」

など、聞きたいことはたくさんあります。

夏休みにニュースを見ていると、爆心地から、五００メートル以内で被爆した最後の近距離被爆者について報道されていました。僕は、そのニュースを見てひいおばあちゃんを思い出し、初めて、「戦争をしっている人がいなくなっていく」ことを実感しました。

戦争を経験した人が少なくなれば、本当に戦争は、過去の出来事になってしまうかもしれない。きのこ雲も、焼け野原も、写真や映像だけのものになるかもしれない。そう考えるとすごく怖くなりました。今でも、ロシア、ウクライナの戦争はおわっていないし、領地や石油の取りあいもなくなりません。

僕がいつも当たり前のように思っている生活、朝おきて、学校に行き友達と楽しく過ごし、少しいやだなと思い勉強をし、家に帰ってご飯を食べる。そして、明日も当たり前のように同じような一日がくると思っています。

しかし、戦争はその「当たり前」を一瞬で奪ってしまいます。今もなお、戦争によって苦

しんでいる人も僕と同じように当たり前の生活をしていたはずです。人権を奪われること、それは、家族や友人と楽しく過ごすこと、勉強をすること、将来こうなりたいと夢を持つこと、何も気にせずに安心して眠ること、これら全ての「当たり前」の生活が奪われることだと思います。命を奪われることだけではありません。

ニュースで、戦争の様子を見て、「もし、自分だったら」と考えたとき、昔のことと今は違うと思っていましたが、僕の近しいひいおばあちゃんにとってはそうではありませんでした。人間が毎日、僕が思う当たり前の生活を得るためにも、戦争をむかしのことであらしたくありません。ひいおばあちゃんに、もっと話を聞いておけばよかったそう思っているだけでは何もかわりません。何も聞けなかった僕だからこそ、これから知っていかなければいけません。そして、知ったことを自分だけではなくだれかに伝えていきたいです。

僕は、ひいおばあちゃんが見たきのこ雲を自分で見たわけではありません。しかし、ひいおばあちゃんが見たものをなかったことにしないことはできます。僕にできることは小さいですが、記憶をうけつぐ人が一人でも増えれば戦争を昔のことただの歴史にしないことにつながると思います。もうひいおばあちゃんに直接話は聞けないけれど、僕はこれからも知っていきたいです。あの日、広島で何がおきたのか、そして二度と同じことをくりかえさないように、僕に何ができるのか考えていきたいです。ひいおばあちゃんからもらった記憶をだいじにする、それが今の僕にできる平和への一歩です。

20 × 20